

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 現代女性の女性性に関する一考察   |
| Author(s)    | 久保, 陽子  |
| Citation     | 大阪大学教育学年報. 1999, 4, p. 159-169  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/8917">https://doi.org/10.18910/8917</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 現代女性の女性性に関する一考察

久保陽子

### 【要旨】

近年、「心」の教育の必要性が叫ばれるようになってきているが、それに伴って教師や親への期待も高まり、ときにはそれがストレスになることもあるように思われる。とりわけ、心理的問題をおこす子供の母親がそうしたストレスにさらされる時、自己の生き方や女性性について考え直すこともしばしば生じている。本稿ではそういった現代社会に生きる女性に注目し、その心理的な問題としての女性性について取り上げた。ここでは、夢や神話を用いて女性性について考察している3人のユング派の心理療法家の見解をとりあげ、そこから浮かび上がってくる現代女性の心理的問題についてまとめた。3者に共通して認められることは、現代の女性達が、自らの内なる女性性とつながりを喪失しているということであった。そしてその失われた女性性は死、汚穢といった性質と同時に、聖なるもの、宗教的なものでもありと考えられた。また、このような現代女性のもつ女性性の特徴は、父権制に彩られた社会の発展と深く関連していることが示された。それらをふまえて現代女性の女性性について新しい視点が示唆されることが期待された。

### 1. はじめに

近年、青少年の犯罪や蔓延化した不登校、校内暴力といった教育的側面から、社会の「心」への関心が広がってきた。それらに伴い、その母親像といったものがネガティブに捉えられがちであるように思う。現在では公立の小・中学校にも一部スクールカウンセラーが派遣されている。筆者も臨床心理士としてそこに関わっているが、子供達の問題のために多くの母親達が相談に訪れている。彼女達は、母親という役割を背負い、その役割を通して、またはそれを越えて、個としての女性という、より根源的、宗教的なところにまで追いつめられている感がある。しかし、このことによって自己に無自覚で日常生活に埋没した母親としての生き方が、その人が本来もっているひとりの女性、ひとりの人間としてのあり方に開かれる契機になるとも捉えられる。そういった女性達にいま、なにが起こっているのかということは壮大なテーマであるが、本稿では特に、女性の内面にある「女性性」に注目して考えてみようと思う。

ひと口に「男性性・女性性」というが、その定義は多次元的であり容易に定義することは難しい(河合,1986)。社会学や人類学などの分野では、これまでに生得的な性別(sex)と社会環境の中で自覚された性別(gender)とが区別して考えられており(Mead, M (1961), Money, J and Tucker, P (1979)など)、生理学的な性差が必ずしも絶対的な男性性、女性性を規定しないということがいわれて久しいが、ここでは特に臨床心理学的な観点から考えてみたい。

心理学的に男性性、女性性については2通りの考え方がある(山口,1986)。まず第一は、男性性、女性性を相反するものとする考え方である。これは現実の男性と女性の性格や行動

を統計的に比較し、女性に多くみられるものを女性性、男性に多くみられるものを男性性とする考え方である。つまり、この考え方でいくと女性性の高い場合は男性性が低いことになり、女性性が低いと男性性が高くなり、ここでは男性性と女性性が一次元で表されることになる。一方第二の考え方は、男性性と女性性が両立するというものである。すなわち、女性性をただ女性のみ存在するものとせず、女性性も男性性もその存在の中にあるひとつの原理であるとする考え方がある。これはJungが「人間は本来に両性具有的存在である」とみなし、男性の中の女性的性格特性をアニマ、女性の中の男性的性格特性をアニムスと概念化したように、人間には生物学的性別とは無関係に、心理的に男性的なものと女性的なものとも存在するという考え方である。本稿であつかう女性性は後者の女性性である。つまり、女性のもつ女性性、または女性の中にある特に女性的なもの、について取り上げ、考察することになる。

もう一点、女性性を考えるときに混乱する概念が母性である。この点についてフェミニストである青木(1986)は「現代」を捉え直すためには「母性原理」と「女性原理」をはっきり区分けしたいと主張しているが、これに対して河合(1986)は「女性というのは男性に対していい、父性・母性というときには子供に対していっており、実際にはいろいろな概念の使い方がなされているが、いずれも象徴的に考えると同様である」と述べている。また、山口(1986)はユング派の分析家3人(Neuman, Ulanov, Guggenbuhl)の提言する女性性の諸側面をまとめているが、その中にはいずれも母性が大きく位置づけられている。これらのことから考えると女性性と母性はいくらか差異のある概念であり、母性というものは女性性の一つの属性といえ、しかもそれは女性性においてもっとも顕著で、とらえられやすいものである(山口,1986)と考えられるであろう。つまり、母性は女性性を考える時に抜き差しならない大きな属性であると考えられる。本稿ではこれらのことをふまえ、「女性性」を考えていこうと思う。

## 2. 女性来談者の臨床心理学的問題

心理療法をもとめてカウンセリングルームや心理相談室などに来談する女性の中には、自らの問題で来談する場合と夫や子どもといった家族の問題で来談する場合に二分される。しかし、不登校や暴力といった自分以外の家族の問題をもって来談された場合でも、治療者との関係が深まり、治療が進む過程においては、母親自身の問題に焦点が当たることは避けられない。いずれにしても心理療法では、母親である部分だけの女性性ではとどまらず、より深いレベルで自らの内なる女性性について考えていくことになるが、ここではまずそういった心理療法の中で、現代の女性達の問題がどのように現れ、捉えられているのかということについて3人のユング派分析家たちの見解を取り上げてみる。いずれも現代女性の女性性に焦点が当てられており、特に心理療法場面で語られた夢や女性性の成長を象徴する神話などを用いて述べられている。まず以下に豊田(1995)による見解をまとめ、続く後節に、西洋と日本の神話から考察しているPerera, S.B. (1981)と横山(1995)による見解をまとめる。

## 2-1 女性の「スピリチュアリティ」

女性の心理療法家である豊田（1995）は、別居中の夫との20年来の夫婦関係を見直すことをきっかけとして来談し、自らの女性性について深く考えた中年女性の事例や、若くて非常に知的な女性のみた夢などを取り上げ、女性性の問題を考察している。その中で、心理療法を受ける女性達に共通にみられる問題は、「自信のなさ、自己価値観の低さ、拠り所のない空虚感であり、ひいては存在の希薄さである」としている。そこではこれらの問題が、現代を生きる女性達が現代社会という男性的な価値観にのっかって行動し、どこかで女性としての本性を裏切ってしまうために起こることが指摘されている。ここでいう男性的な価値観とは、「合理的精神のもとに科学文明の発達した男性的な枠組みの社会における価値観」である。そして女性達は知らないうちに男性の期待にそって、あるいは男性からの評価を求めて行動してしまっているために、自分達の足場を不確かなものにしてしまっている、と考察されている。そしてそれは女性達がいつのまにか自分自身の気持ちを裏切ることでもあり、また、自分を傷つけ、否定する方向に進んでしまうことでもあることから、現代の女性達はいつのまにか心にぽっかりと穴のあいたような空虚感を感じるようになるという。さらにはそれを埋めるために、ある女性は過食し食べつづけることで、ある女性は自分の子供でそれを埋めようとするところに現代女性の病理が顕在化するということになるのである。ここで豊田は、「この女性の心の中のぽっかりと空いた穴にあるべきものが、本来女性から女性へと伝えられていくはずだったもの、女性のスピリチュアリティである」という。ここでいう「女性のスピリチュアリティ」とは、「深い女性の知恵のようなものであり、合理的な理性を越えた超越的な知恵」のことである。また、「自然や宇宙と感応するようなちからであって、すべて対立するものを結び付ける、つまり天と地を結び、心と身体を結び、生と死を結び、意識と無意識を結ぶようなものであり、ファンタジーや想像力の源泉ともなるもの」である。そして、それはやはりこの文明世界を成り立たせてきた長い歴史の中で、いつのまにか女性達が置き忘れてきたものであるという。

## 2-2 シュメール神話にみる女性の「イニシエーション」

N.Y.の女性分析家であるPerera, S.B.は、その著書『Descent to the Goddess, A Way of Initiation for Woman. (訳題「女性のイニシエーション」)』の中で、男性本位の社会にうまく適応し、弱い母親を能動的に拒否し、知性や男性的な精神に過剰に同一化してしまっている女性を「父の娘 (daughters of the father)」として捉えている。そして、そういった女性達が、本来の根源的な女性性を回復するために必要な「女性のイニシエーション」を、シュメール神話における「イナンナの冥界下り」の物語から考察している。ここでは天と地の女神イナンナの下降と回帰が主題となっており、Pereraはこの物語からイナンナが、内なる女性性を成熟させるプロセスを読みとっている。少し簡単にはあるが、物語を追ってまとめる。

この物語は、理由は定かではないが、天地の女神イナンナが地下の世界、冥界へ下降することを決心するところから始まっている。地下の冥界に下降したイナンナは、冥界の掟にそって、7つの門をくぐり、服を剥ぎ取られ、むち打たれ、最後には地下の冥界の女神エレシ

ユキガルから「死の目」を向けられ死んでしまう。そしてその死体は木釘にぶら下げられるのである。その後、イナンナの忠臣であるニンシュブルや知恵と水の神である父、エンキ神の助けにより、イナンナは蘇り、地下の冥界から上昇し、地上へ戻ることになる。ここまでが天地の女神イナンナの地下への下降と地下からの回帰のプロセスであるが、物語にはさらに続く。そこには回帰後のイナンナの姿と、Pereraが「イナンナの下降と回帰が生み出したものの象徴」を現しているという女神ゲシュティンアンナが登場する。暗黒地下の冥界から蘇生したイナンナであったが、彼女は自分の身代わりを冥界に送らねばならず、そのために冥界から悪霊達がついてくることになる。イナンナは身代わりとして忠誠な町の神々ではなく、イナンナの身を心配することなく生活を楽しんでいた夫ドゥムジに「死の目」を向け、冥界に送ろうとする。ドゥムジはイナンナの兄ウトゥに姿を蛇に変えてもらい、姉のゲシュティンアンナに助けられるが、ついには悪霊達によって冥界へ連れていかれることとなる。その後、イナンナは、夫を失ったことを嘆き悲しみ、また、夫の姉ゲシュティンアンナの弟を思う気持ちに心動かされ、夫ドゥムジとその姉ゲシュティンアンナとに半年ずつ冥界にとどまるように運命を与えた、という流れで物語は終わる。

この物語にみられるイナンナの下降と回帰というプロセスからPereraは、「上方と下方の分裂を癒す」モデルを示しているといい、上方とは「集合的な理想」であり、下方は「女性性全体のパターンに潜む、力強く、両極的で、変容的で、変遷していく現実」であるとみている。ここではイナンナは天上界、上方に存在するものであり、エレシュキガルは冥界、地下界に存在し、下方を象徴するものであろう。この上方を象徴するイナンナの下降と回帰というプロセスから、意識的な世界、それをめざす価値観の中で抑圧されて生きてきたエレシュキガルは、イナンナの一部であり、イナンナがエレシュキガルと出会うことによってこの上方と下方の分裂が統合され、真に女性性の全体性を取り戻していく過程が見て取れるのである。

イナンナが冥界への下降を意志するところからすると、イナンナの天地の女神として持っていた本来の性質が、「集合的な理想」によって彩られ、つまりは、父権性の道徳や審美的な規定によって圧縮されたり、理想化されたりして、本来の具体的で、陽気で、官能的で、力に満ちた女王に相応しい多面性を持つ女性性が失われている状態であったと思われる。一方、地下界の女神であるエレシュキガルについては、父権性の意識の外側にある異質なところへと追放されたものであるが、追放される前は、天上界で穀物の女神として存在していたことから考えると、エレシュキガルは地上にあって成長していく穀物と、地下にあって再び芽を出すために死んでいく種という自然界の大いなる循環そのものを象徴しており、その力は破壊だけでなく、変容にも関わるものといえる。上方のイナンナが、地下、下方のエレシュキガルに出会うことで、死にいたり、肉体の腐敗を体現して蘇り、再び上方へ回帰する。そして天上界へ回帰したイナンナは、かつての美しい処女、無垢な女神ではなく、「死の目」をもった醜く、自分本位でもあり、それまでの理想女神とは違い、万物の変容、命には犠牲を払うことを受け入れた女神へと変容している。さらには夫を失った哀しみを嘆き、涙を流し、夫を悼み、深い悲しみをも引き受けているのである。これはイナンナが、「両極性をもつ永遠なる女神エレシュキガルと接触することによって変わり、影響を受け」、女性性の全

体性を回復させたのであり、また「暗黒の女神の悪魔的な力を求めることで、はじめて娘から、怪物のような父権性の力に立ち向かえる大人へと、成長していくための強さ」を得たものと考えられる。上方に象徴されたイナンナの下降と回帰から捉えた女性性のイニシエーションは以上のプロセスをふむが、Pereraは、そのイニシエーションをゲシュティンアンナについても考察しているので、以下に示す。

Pereraによればゲシュティンアンナは、「イナンナの下降と回帰が生み出したものの象徴」であり、「イニシエーションの全過程の結果であり、体現化」であるという。彼女は自分の立場を取り、自分固有の価値観を保ち、自分の深層に関わるだけでなく、男性性なるものにも愛情を持って関わるができるモデルであり、私たちにこのイニシエーション、つまり天地の女神イナンナと冥界の女神エレシュキガルに象徴された根源的な女性性のエネルギーパターンを、人間としての生にいかに関現し、ひとり人間としていかにそれらに関わっていくかを示すひとつのモデルである、ということになる。このことから考えると、天上界の女神イナンナが地下の世界から回帰した後に現れるゲシュティンアンナは、下降と回帰というイニシエーションを通して得られる全体的な女性性を備えたイナンナの姿でもあるといえる。Pereraによれば、現代女性は、「とにかく意識的になろうとし続けた、長い歴史があり」、さらに現代の西洋では、それら父権的超自我が、中世に制度化された宗教によって異常に肥大し、そういった文化に「同一化していたため、自分自身の女性性の基盤や個人としての母親を、しばしば、弱々しいもの、時代遅れの人とみなして疎外してきた」、こういったことが結果的に現代女性をよりどころを持たない、父権性の娘達を生み出してしまったといえる。これらの現代に生きる女性達、つまり「父の娘」達は、父権性の精神的な娘としてのアイデンティティを犠牲にした上で、超個人的なエネルギーの母胎、女神の精神の内へと下降することが求められる。そこは地下の、混沌とした世界であり、文化的に抑圧されてきた女神(エレシュキガル)の側面である。Pereraのこういった主張に対して河合(1998)はこの訳書の冒頭にある解説で、Pereraの主張はキリスト教文化圏における圧倒的な「父権的意識」が前提としてかかれており、社会的に父権性を持ちながらも、心理的に母性優位であった日本とは事情が異なり、その点に留意する必要があると述べている。しかし、同時に「日本にも割に多くなってきた『父の娘』」の存在もあり、いずれにしても日本人が日本の女性性について考えるのに、有益なヒントを与えてくれるだろうと結んでいる。河合の指摘にあるように西洋のキリスト教文化よりも複雑な文化形態を持つ我が国では、より複雑な女性性を育てており、それらは慎重に考える必要があるだろう。

### 2-3 日本神話にみる女性の「変容」

男性の心理療法家である横山(1995)は、女性性を主題とした著書『神話のなかの女達 日本社会と女性性』のなかで、日本神話の女神たちをいくつかあげて日本の女性性について論じている。中でも太陽の女神アマテラスの考察は興味深く、ここに取り上げてみる。まずアマテラスの誕生以前から取り上げてみる。アマテラスを生じさせたイザナギ・イザナミ2神は、地上に降り、まず大八島国という8つの島を生み、次に6つの島を生み、さらに海、風、山などの神々を合わせて35柱を次々と生んだが、最後に火の神を生んだためにイ

ザナミは病み、この世を去ってしまう。それを悲しんだイザナギは黄泉の国までイザナミを追っていくのだが、黄泉の国での恐ろしいイザナミの変わり果てた有り様に恐れをなして逃げ出す。イザナミの追跡から逃れたイザナギが、黄泉の国の禊ぎを行う際に左目から生まれたのが女神アマテラスである。アマテラスは、天上の世界である高天原を統治し、イザナギの右目から生まれたツクヨミが夜の世界を、鼻から生まれたスサノオが海を統治した。常識的に考えると、この三柱の母親はイザナミということになり、スサノオ自身も母親はイザナミであるといっているのだが、横山はこれを象徴的に考え、イザナギが自分の手だけで子供を生み出したことを重要視している。それにはイザナミのむさぼり喰う側面、母親の否定的な側面を拒絶しつつ、イザナギがひとりで子供を産んだという心理的意味を考えてのことである。つまり、アマテラス、ツクヨミ、スサノオの3柱を生んだことから考えると、ここでのイザナギは、男性性と女性性を持ち合わせた存在であるといえるが、イザナミの否定的な側面を拒絶していることをふまえると、男性性、精神性の方がより際だっている存在であるといえるのである。アマテラスはこのイザナギの左目から生まれており、目は典型的な「自我・意識」のシンボルと考えられることから、アマテラスがこの父親の特徴（男性性・精神性）をもっとも顕著に体現していると考えられるのである。つまり、アマテラスはもっぱら大地・本能と結びついていたイザナミのイメージと比べると、はるかに天上の世界、即ち「精神性」の世界と結びついていたといえる。このような性質を持つアマテラスは心理学的にいうと「父にとらわれた娘」、「父の娘」である。このことはスサノオがアマテラスに会いに高天原に来た際に、アマテラスがスサノオを侵入者とみなし、自らの男性性を鼓舞して武装し、スサノオの進入に備えたというところからもみてとれる。つまり、この時点でのアマテラスは自分の女性的なレベルで弟に対応できず、男性的な対応で身を守るしかなかったのである。このように男性性・精神性と強く結びついていたアマテラスだったが、彼女もまたスサノオとの誓約（持ち物を交換することで子供をもうけた）のとき、あるいは、機屋に皮を剥いだ馬を投げ入れるというスサノオの乱暴な侵入を受けたときには、自らの内的な女性性の問題に直面せざるを得なくなった。横山によれば、その後アマテラスは女性のこころの「上方部分」と「下方部分」の統合を成し遂げ、ついには、「父の娘」から成熟した女性へと変容していく。ここで横山のいう「上方部分」は「父の娘」といわれる意識性、精神性を示し、「下方部分」は女性性の大地的な本能的な部分のことである。ここで取り上げたいのは、アマテラスがこのような見事な変容を成し遂げる際に重要な役割を担った「アメノウズメ」という女性の存在である。アメノウズメは、アマテラスがスサノオの暴力的な行為に恐れおののき、天岩屋戸という洞窟へこもってしまった時に、洞窟からアマテラスを再び外の世界に出すために、自らの胸と性器をさらけ出して狂喜乱舞した女性である。物語では、このアメノウズメの踊りを周りに控えていた神々が笑い、その楽しげな笑い声を洞窟にこもっていたアマテラスが聞き、自分が隠れて皆が悲しんでいるとばかり思っていたのに、外では何事が起きているのかといぶかしく思い、洞窟から顔を出すのである。これがアマテラスが洞窟を抜け出すきっかけとなったのである（川副,1976）。スサノオという男性性の侵入に出会い、深い女性性に直面し、洞窟へ退却したアマテラスであったが、いまやアメノウズメによって体現される、真の自然的存在としての女性性、横山のいう女性性の「下方部分」と直面し、

これによってアマテラスは成熟した女性へと劇的な変容を遂げることになるのである。心理学的に見ると、アメノウズメのもつイメージは、「自然に基づいたエロスをも含めた女性的性質であり」、これはイザナミのもっていた醜悪さで表わされるイメージとつながっていると考えられている。横山は、イザナミのこういった部分を拒絶したイザナギから生じたアマテラスが、女性性の成熟を遂げる時に、その拒絶されたイメージと重なる真の女性性に直面せざるを得ないところは心理学的にも深い意味を含んでいると指摘している。

ここでみてきたようにアマテラスの女性性の成熟に重要な役割を担ったアメノウズメであったが、本稿では現代女性の心理的問題を念頭に置いていることから、その後のアマテラスとアメノウズメの関係に注目してさらにみていくことにする。アマテラス自身もアメノウズメを高く評価しており、その後のアマテラス神話の大きな柱である天孫降臨の際にも、もう一度このアメノウズメの力を借りている。この働きによってアメノウズメは、サルタ（猿田）の姓を授かることになる。その後、日本の歴史の初期において、アメノウズメ一族はサルメ（猿女）と呼ばれ、特殊な魔術的力を持つ巫女集団として人々と神々をつなぐ役割を担っていたという（西郷,1967）。しかし、社会が父権性を強めて行くに従って、この一族の巫女的イメージが大きく変わり、衰退していくことになる。つまり、大和朝廷の力が強まり、その支配が拡がると同時に、政治力の統制を目論んで、アマテラスをいつき祭る斎宮制がしかれ、猿女は宮廷に召し上げられ、鎮魂祭と大嘗祭に使える一介の宮廷巫女に過ぎなくなっていくのである。一方、アメノウズメを遠ざけ、アマテラスに奉仕することになった巫女斎宮は、処女でなくてはならず、男性との接触が禁じられた。この巫女斎宮のイメージと性器を露にしたアメノウズメのイメージは対照的で、次第にアマテラスのイメージ自身が処女なる巫女・斎宮と重なっていき、アメノウズメの要素が除去されることになるのである。このようにかつてはアマテラスとともにあり、シャーマニスティックな文化状況では重要な役割を示していたアメノウズメの性質が、次第に文化の中心から周辺へと、また、上層から下層へと追いやられていく姿が見えてくる。横山は、このように官僚制度が拡がるにつれ、失われてきたアメノウズメの性質は、アマテラスが真の女性性を成熟させるために必須としたように、内なる女性性の全体性を成し遂げるには必要不可欠な要素であると述べている。

#### 2-4 3者の共通点

これまでに3人の心理臨床家が考察する女性性の問題について概観してきた。これら3つの見解から浮かび上がってくる現代女性の姿には、いくつかの共通点が挙げられる。まず第一には、女性性の中に欠落部分がある、という特徴である。豊田はそれをポツカリとあいた穴、空虚感と表現し、この欠落部分にあるべきものを「スピリチュアリティ」といつている。Pereraと横山が、女性性の変容を象徴する神話として取りあげた女神達にも同様の特徴がみられる。シュメール神話における女神イナンナは、「理由は定かではない」が下降を意志する。そして下降した世界でイナンナは、自分とは質の異なる女神エレシュキガルに出会い、このエレシュキガルの性質を自らの性質の中に統合するのである。このイニシエーションから考えると、イナンナが下降を意志する段階で、その心理的な女性性は上方と下方の解離という限界状態にあり、上方を象徴し、下方を求めるイナンナには下方部分が欠落していたと



考えることができるであろう。また日本神話におけるアマテラスの変容についても同様に考えられる。父イザナギの左目から生まれたアマテラスは意識的、精神的、男性的な性質が強調されており、その時点でのアマテラスには、アメノウズメ的な性質が欠落していたと考えることができる。また、その後のアマテラスとアメノウズメの関係の変化にあるように、アマテラスの女性性の変容に必須の性質は、アメノウズメ的性質であったにも関わらず、社会の変化、組織、意識の発達により、次第にアマテラスのイメージからアメノウズメの性質が排除されていく。アメノウズメ一族が社会文化の周辺部、下層部へと追い込まれ、押し込められていったのと同様に、内なる女性性に必須のアメノウズメの性質も心の周辺部、下層部に押し込められていったと考えられる。つまり、内なる女性性においても発達し統制された上層部と、未成熟なままに押し込められ、混沌とし、それゆえに計り知れないエネルギーがうごめく下層部とが大きく分離した状態にあることが、現代女性の女性性の問題の一つであると考えられる。この場合、統制され、意識された上層部からすると、下層部は意識されず、欠落部分と考えられる。

この欠落部分においてはさらに共通点がみられる。すなわち、イシュール神話における女神イナンナの欠落部分として考えられた下方部分、つまり冥界の暗黒の女神エレシュキガルと日本神話におけるアメノウズメには共通の性質が見いだせる。横山がいうようにアメノウズメには大地的・本能的性質があり、これはどこか黄泉の国イザナミの性質と通じるところでもあることから、女性性の欠落部分を特徴づけるものの一つとして冥界、黄泉の国に表わされるもの、死、腐敗、汚穢といったものがあげられるだろう。また一方で、この欠落部分には他の意味あいがあることも考えておく必要がある。例えば、アマテラスを洞くつの中から再び外の世界へ引き出すきっかけとなったアメノウズメの踊りは、性器をさらけだし、「神がかりになったように踊り狂う」のであり、この神がかりのダンスはヌミノース的なものを想起させるものである。また、その際にさらけ出したという女性性器は民俗学でいうと、豊穣性を生み出すある種の魔術的な意味やヌミノース的な力とも関連し(宮田,1983、佐伯,1987)、それらは先に挙げた死、腐敗、汚穢といったものとは反対のもの、つまり聖なるもの、神秘的なもの、宗教的なものの特徴でもある。また、シュメール神話のイナンナにおいても、Pereraは、下降した冥界でのプロセス、すなわち、衣服を剥ぎ取られ、屈辱をうけ、むち打たれ、死に、磔になり、やがて復活するといったことはキリストの受難の予告ともとれるという。そしてそういった受難を体現したイナンナは「現代女性の苦悩と償いを実践できる神のイメージを与えてくれる」と述べ、その宗教性に触れている。さらに、豊田(1995)は、女性のスピリチュアリティが働く場として心理療法を挙げ、それを錬金術と重ねて考察しているが、その中で「神秘の妹」「聖なる結婚」に言及しているのは、このスピリチュアリティのもつ聖なる性質を暗に示すものとも考えられよう。河合(1998)は「女性のイニシエーションにかかわるいろいろな力は、超個人的な性質をもつことを知っていなくてはならない」ことを指摘しているが、この超個人的な性質こそ、上に挙げた相反する二つの特徴に共通するものである。

最後に、三者とも現代女性に女性性の一部に欠落部分が生じてしまうことに、現代社会の文明化、つまり意識的になり、分断し、すべてをコントロールしようとする父権制、男性原

理が影響していると考えているようだ。豊田（1985）は繰り返しになるが、現代女性の心理的問題は、男性原理による価値観を取り入れ、本来の女性の価値観に反する適応を身につけたためにおこる自己価値観の低下であり、心の空虚感であるという。横山（1995）は神話的な世界に限らず、これまでの歴史や未開社会における通過儀礼などの中では、セクシャリティや豊穡性の神秘性、宗教性などを教えられることで、少女は心の深いレベルの成熟をさせてきたが、現代社会では、科学が、生理や出産にまつわる多くの偏見や迷信を取り除き、それと同時に、女性の心の深いレベルで重要な役割を果たしている自然の神秘性をも無視してきた、と述べている。つまり、日本社会が歴史の中で真に女性性を成熟させたアマテラスに、斎宮のイメージ、男性原理により理想化された女性イメージを重ねていったことと並行して、日本の「集会的意識」の中心から、心理学的に重要な存在であるアメノウズメの性質が排除されていったことを考察し、社会の文明化、父権制の発達プロセスと現代女性の女性性の歪み、偏向が無関係でないことを指摘している。また、西洋世界での女性心理療法家である Perera になるとさらに直接的な言及がなされている。つまり、西洋の神話の中でみると、女神達は「天上界の女神として持っていた性質のほとんどは、西洋において脱神聖化されるか、男性神によってとってかわられるか、あるいはまた、父権制の道徳や審美的な規定によって過度に圧縮されてしまうか、過度に理想化されてしまうこと」になり、ついには「女神がかつて持っていた力のほとんどは、女性の命との結びつきを失うこと」になってしまうことになると言う。そしてこの女神の矮小化に伴って、女性達は西洋文化の周辺に狭く制限された役割、男性や、社会的地位や子供達に従属するといった役割で生きてたのであり、そういった生き方においては本来、女性が深くかかわり合うべき聖なるものとの関係をも失うことになったと指摘している。さらには西洋宗教に見られるような父権制の超自我肥大により、女性の生命力や本能の価値が貶められ、それがよりどころを持たない、現代の父の娘達を生み出したことを考察している。つまり彼らは揃って、男性原理や父権制の発展が女性の女性性に否定的な影響をおよぼした一つの要因であると言う。父権制については、前述した河合の指摘にあるように、日本文化と西洋文化との違いを深く考察する必要がある。しかし、日本女性の歴史の中で、かつては出産という神秘的な力を持ち、巫女としてその力を十分に発揮していたけれども、その後の農業の発達、家の成立、村、組織の発展に伴い、本来の女性的な力や働きを限定され、排除されていったことは事実であり（脇田他,1987）、それが女性の心理に多大な影響をおよぼしてきたことは確かであろう。

### 3. おわりに

本稿では、女性性の問題を取り上げているユング派の見解をいくつか挙げ、その共通点をまとめてみた。それらの見解は、いずれも現代の女性が本来の女性性を取り戻し、回復させることを指摘していた。それは神話でいうとイナンナがエレシュキガルに象徴される性質を統合する必要があることであつたし、アマテラスがアメノウズメに引き出されることであつた。ここで筆者が関心を寄せるところは、ここでとりあげたような女性性の問題がなぜ生じ

ることになったのかという点である。本稿で取り上げた著書の中では、前節に述べたように父権性の社会からの影響が挙げられているが、筆者には女性が単に受容的にこの影響を被っただけではないような気がする。むしろ男性原理に対して積極的、自律的に受動的な対応をすることで、自らの女性性を遠ざけてきたようにすら感じられるのである。この点については今後検討していきたいが、その際それに関してHillman, J. (1985)が「正しく離されたものだけが十分に結びつけられる」という錬金術師達の言明を引用しているのは示唆的である。女性性の問題は多くの分野で取り組まれてきたテーマであるが、捉えようとすればするほど、拡散し、混沌としてくるというのが筆者の正直な感想である。これは「女性原理というものが、言語化を嫌う傾向を内包している」といった河合(1985)の指摘のように、言語化して捉えることが難しく、その言語化する、またはしようとする時点ですでに女性性をつかみ損ねてしまうといったことがあるのかもしれない。女性の心理療法家であるSignell, K.A. (1990)は、「女性の叡知は伝統的で父権的な方法つまり言葉、客観性、コントロール、意識的な知識などによってのみもたらされるのではなく、もっと微妙な方法によってもたらされる(略)・・・女性の知の基本的な源泉は、私たちの内なる感情やイメージから湧き出る」と考えて夢の分析を行っている。ここで紹介した3人の心理療法家も夢を手がかりに女性性を考えており、神話や昔話の象徴表現やイメージといったものも女性性を考え、捉えていくのに重要な要因になると思われる。

また、女性達が社会の影響を受け、その社会が男性原理的な価値観であるとする考えからすると、女性が自らの男性性を育む源となり最初に出会う男性となる父親との関係も女性性を考える上で重要な要因として考えられる。さらに日本社会は、アメリカよりも社会的に男性優位であるように見えるが、心理的には母性的傾向が強い、という河合(1997)の指摘があるように、女性の女性性について考えるときには日本文化の特質を十分に考慮する必要がある。これらの点に関してはこれまでに多面的な研究がなされており、今後はそれらを含めてさらに考察していく必要がある。

#### <引用文献>

- Hillman, J. 1985 ANIMA : An Anatomy of a Personified Notion, Spring Publication .  
 河合隼雄 1976 「母性社会日本の病理」中央公論社.  
 河合隼雄 1985 『序』(玉谷直実著「女性の心の成熟」)創元社.  
 河合隼雄 1986 「母性社会」の母性と父性-青木やよひ対談 母性をさぐる4 青年心理 vol.55.  
 河合隼雄 1997 『日本版への序文』(Signell, K.A著 高石恭子他訳「女性の夢 こころの叡知を読み解く」)誠信書房.  
 河合隼雄 1998 『解説』(Perera, S.B.著 山中康裕監修 ユング心理学選書20「神話にみる女性のイニシエーション」)創元社.  
 川副武胤 1976 「天岩戸神話の構造」高天原神話 講座 日本の神話4, 有精堂.  
 Mead, M 1961 「男性と女性」(上下)田中須美子・加藤秀俊訳, 創元新社.  
 宮田 登 1983 「女の霊力と家の神」日本の民俗宗教, 人文書院.  
 Money, J and Tucker, P 1979 「性の署名」朝山新一他訳, 人文書院.  
 Perera, S.B. 1981 Descent to the Goddess, A Way of Initiation for Woman.  
 (ユング心理学選書20「神話にみる女性のイニシエーション」1998 山中康裕監修 杉岡津岐子・小坂和子・

- 谷口節子訳, 創元社) .
- 佐伯順子 1987 「遊女の文化史 ハレの女たち」中央公論社.
- 西郷信綱 1967 「古事記の世界」岩波新書.
- 斉藤 学・波田あい子編 1986 「女らしさの病い 臨床精神医学と女性論」誠信書房.
- Signell, K. A. 1990 *Wisdom of the Heart : Working with Women's Dream*, Bantam Books.  
(「女性の夢 こころの叡知を読み解く」1997 高石恭子他訳, 誠信書房) .
- 玉谷直実 1985 「女性の心の成熟」創元社.
- 豊田園子 1995 「女性的なスピリチュアリティと心理療法—ユング派の観点から—」精神療法, vol.21 no.3.
- 氏原 寛 1990 「心理臨床の実際 続・カウンセラーを志す人のために」創元社.
- 山口素子 1986 「女性性の諸側面について」京都大学教育学部紀要XXXII.
- 横山 博 1995 「神話のなかの女たち 日本社会と女性性」人文書院.
- 脇田晴子・林 玲子・永原和子編 1987 「日本女性史」吉川弘文館.

## A Study Concerning Femininity in a Modern Woman

Yoko KUBO

Recently, as the necessity for education of the “mind” is being advocated, at the same time anticipation toward teachers and parents are on the rise. Thus, it is thought that this can result in taking on the form of stress at certain times. In particular, when mothers of those children with psychological problems are exposed to this sort of stress, they are often forced to reflect upon their own way of living and their own femininity. This report puts its focus on women living in this sort of modern society who have to deal with such psychological problems. Here, a number of views cited by three Jungian psychotherapists concerning the femininity examined by using dreams and myths are given, and the psychological problems of modern women which have surfaced through this are summarized. What is commonly recognized by the psychotherapists is the fact that modern women have lost their connection with their inner femininity. Not only has this loss of the femininity been regarded as something to do with death or impurity, but at the same time as something holy or religious as well. Moreover, it has also been pointed out that the characteristic of the femininity possessed by modern women is deeply rooted in the development of a society where a paternal rights system is strong. Based on this, it is anticipated that new aspects concerning the femininity of modern women may be suggested.